

2. 駿河湾並びに隣接海域の海況

中 村 保 昭 (静岡県水産試験場)

静岡県水産試験場は1963年のいわゆる異常冷水年を契機に、翌年の1964年4月以降より毎月1回漁海況予報事業の一環として駿河湾並びに豆雨、遠州海域の29測点(0~300m)において、組織的な海洋観測を実施し、1974年3月で10ケ年経過した。

本報告ではこれらのうち、1964~1972年の8ケ年の水温および塩分の資料のうち、主として水温について、月別、層別平均値を求め、この値を基に当海域の季節変化を検討した。

さらに、上記観測を空間的に補なうため、駿河湾の深層まで実施した調査結果(四季6回)をもつけ加えて検討した。

結果は以下のように要約される。

1. 0~50mの変化は、2月を中心と冬季小さく($<3^{\circ}\text{C}$)、6~9月を中心とする夏季に大である。($>6^{\circ}\text{C}$)。

2. とくに、表面の変化は8月、石廊崎~駿河湾々口部で大きく($>6^{\circ}\text{C}$)、1月、湾内で小さい($<3^{\circ}\text{C}$)。

3. 200m深の極小は8月に示す海域が多い。

4. 鉛直方向における水温の季節変化は200m深においては冬季が最高水温となる。

5. 8月における、200m深の水温極小の出現に関連して、8月を中心に50m以深が低温となる。50~200m深の水温四季変化は50m以浅と異なり、年2回の高低極を示す。これは特に、夏季の下層冷水の移流によるものと考えられる。

6. 下層500m付近においても、季節的には水温で約 1°C 、塩分で約 1‰ 、溶存酸素量 $1\text{ml}/\ell$ 程度の年変化がみられる。さらに、1,000m深においてもわずかながら変化が窺われる。

7. 表層部の昇温は4~5月に($15\sim19^{\circ}\text{C}$)、降温は11~12月に($20\sim17^{\circ}\text{C}$)、それぞれ最も顕著となる。下層(200m深)の昇温は2~3ヶ月遅れる(表層8月極大、下層11月極大)。

8. 駿河湾内の水温年較差は概ね次のようである。

0m: $1.5\sim1.5^{\circ}\text{C}$ 、50m: $8\sim9^{\circ}\text{C}$ 、100m: $4\sim6^{\circ}\text{C}$ 、200m: $2\sim3^{\circ}\text{C}$

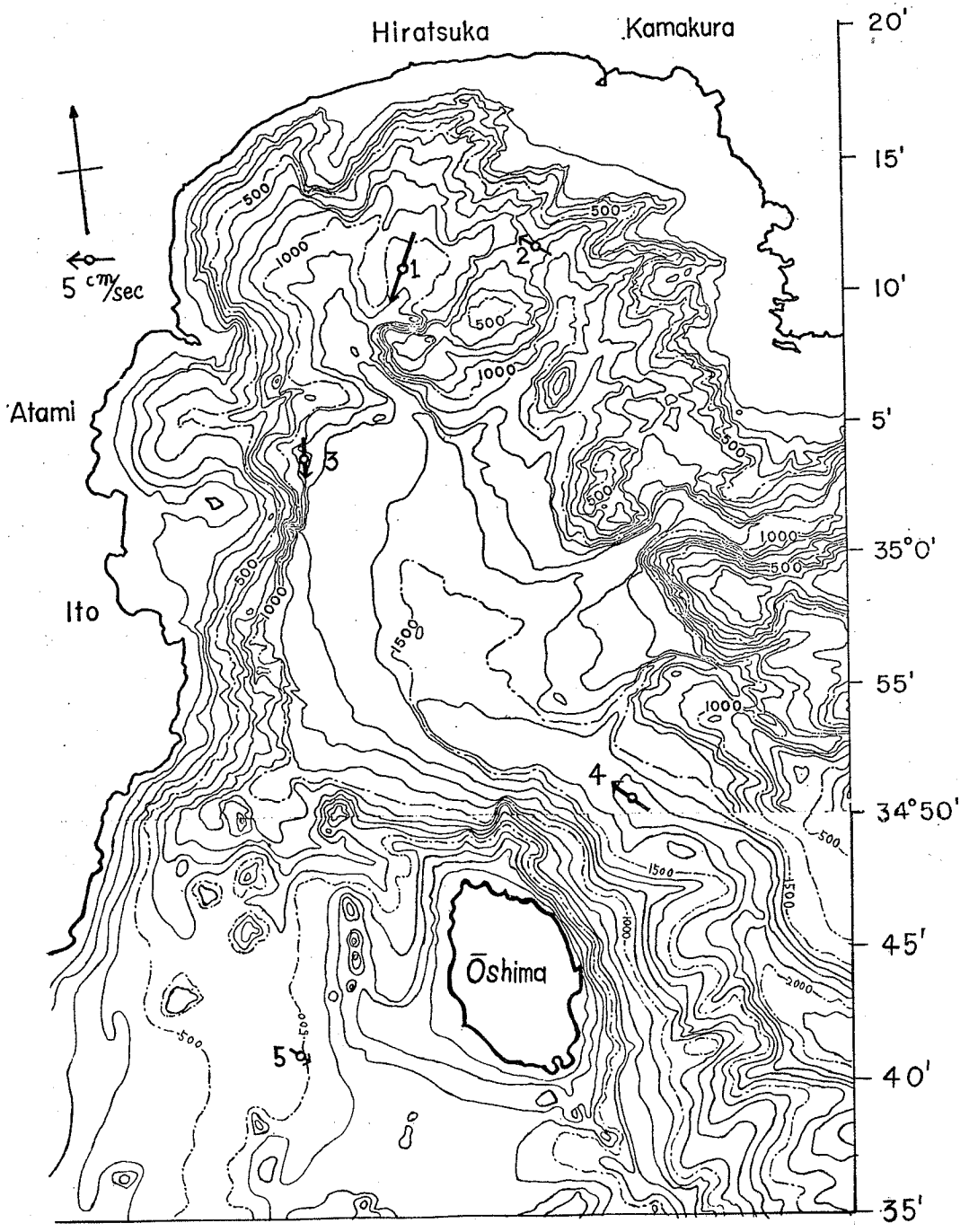
なお、詳細については静岡県水産試験場研究報告 $\text{No.}9$ に報告した(印刷中)。

3. 相模灘の底層流について(要約)

岡 崎 守 良 (理化学研究所)

海底上の高さ約60cm付近の、いわゆる底層の流速を測る振子式流速計を用いて、1969~1972

にかけて相模灘の5点で測流を行なった(第1図)。水深は730m~1720mまでで、測定時間隔は5~20分間、期間は24~58時間とその時の状況に応じて変えた。

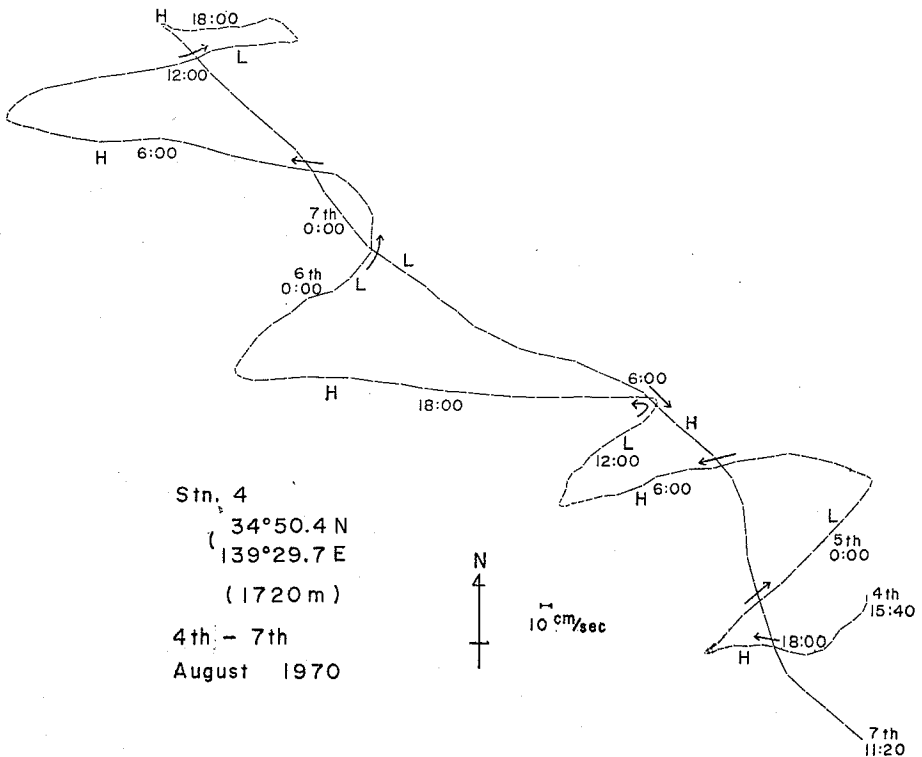


第1図 相模湾の海底地形と流速計設置場所

結果の大要は次の通りである。

1. 変動成分はどの点においても約12時間成分が顕著であった。
2. 湾口部を除くと流速の分布はほぼ $1 \sim 1.5 \text{ cm/sec}$ であり、出現頻度の最高は 5 cm/sec 程度に多く見られた。
3. 各測点とも、上げ潮・下げ潮時の流向の変化にそれぞれ特徴がみられるが、全体としては反時計廻りに流入出するように見える。又潮時に関係なく、底層の水が外海へ一方的に流出する期間のある場合も観測された(才2図)。
4. 2~4潮時の観測の解析から、恒流的な成分に言及するのは無理であるが、5点の恒流成分をまとめると、海底付近に湾全体として反時計廻りの環流がうかがわれる(第1図)。

以上は変化の大きいであろう海域を、短時間ずつ数年にわたって、特殊な流速計により測定した結果の一部である。



第2図 st. 4における流向、流速の時間的変化

今後は流れを底層～表層まで鉛直方向に数点で同時観測して、相模灘の水の動きを追求したいと考えている。